

阪本氏はそれらの点を曖昧にせず、常に今後の課題として残されていることを明記している。本書は村上説へ批判的立場からの最初の本格的な研究書であるということ以上に、著者のこのような態度によって今後の研究の起点たりうることにより大きな価値がある。各所にちりばめられた挑発的な論点はその恰好の素材である。

村上説は相対化され「一つの見解」になろうとしている。これからはそれを批判するだけの研究も、それをそのまま踏襲するもの同様に、さして意味を持たなくなり、各人がどのような像を提出するかが問われるようになるだろう。研究は確かに新たな局面へと展開しつつあり、本書はまさしくそれを告げる著作となっている。

(山口輝臣)

溝口雄三・浜下武志
平石直昭・宮嶋博史編

『交錯するアジア』

(アジアから考える 1)

東京大学出版会 一九九三・九刊
A5 三〇九頁 三〇九〇円

本書は、「アジアから考える」シリーズ全七巻の第一巻である。本シリーズは、「現在および将来の日本とアジアの諸問題を展望しうる、新たな問題提起を得よう」とすることを目的とし、その為に「日本におけるアジア認識の歴史的展開に着目しつつ、日本およびアジアそしてその双方にかかわる多くの主題について、関心の所在、分析や理解の枠組を問題史的に検討する」。執筆者には、日本研究者を含むアジア各地域(史)研究者が加わっている。このシリーズでは、各論文が内容的に一定方向に向かうことを求められてはいない。各執筆者が「自らのアジア研究・日本研究の切り口を示す」すことにより、方法的、概念的に表出する各研究者のアジア像・日本像が、現在の研究状況、ひいては現代における

〈知〉のありかたが端的に示されるのである。本書は『交錯するアジア』と題され、『交錯』については編集者の濱下武志が、序の中で「本巻は、アジアを一つの実体として捉えようとするよりも、むしろアジアの多面性・多質性・多義性また歴史性を前提として、それらが『交錯』しあう様子を様々な切り口によって示すことを試みてい」と述べている。また「アジア」については、巻頭の「刊行にあたって」に於いて詳説されているので参照されたい。本書は、三部構成で十一論文が収録されている。第一部では、主としてアジア研究における方法論が、分析手法とテーマの組み合わせの中で論じられている。第二部では、執筆者それぞれの分析主題にもとづいてアジア・日本が論じられている。第三部では、日本におけるアジア認識の歴史的展開が様々な角度から論じられている。

第一部には、園田茂人「フィールドとしてのアジア」、小島毅「地域からの思想史」、伊藤亜人「東アジアの社会と儒教」、弘末雅士「東南アジア像」の四論文が収められている。園田論文は、日本の社会学とその

対象としてのアジア研究の展開を論じる。まず戦前の鈴木栄太郎や福武直をとりあげ、社会学の発展を促進し、日本理解を深めたと位置づける。そして戦後の研究を、「様々なアジア」の発見を目的とした「個性的記述的」研究が主流になるとし、この様な研究が隆盛を究めたからこそ、社会学との関係が希薄になったという戦後研究の問題を指摘し、その原因を考察する。そして現在のアジアの社会状況の中では、遊離した社会学とアジア研究とが再び歩みよってこそ両者の抱える諸問題を克服できると主張する。小島論文は、明末清初期の思想に関して、まず島田虔次、溝口雄三の業績に内在するヨーロッパ思想史対応型、陽明学中心という共通の問題点を指摘し、その原因について、陽明学が一见ヨーロッパ思想史と同じ様な問題を扱っていたからであると、自らの分析対象を明末清初に朱子学の牙城だった福建の思想状況に絞り、中国に則した思想史を地域別に築くことを主張する。そして「中国」という語自体への疑問を投じる。伊藤論文は、テキストに基づいて論じられてきた儒教研究と、フィールド

に基づく人類学者により考察されてきた宗族、風水等の研究との結合を目指し、儒教批判なしに近代化した韓国を調査場を選び、社会生活の中に溶け込んだ儒教的要素を抽出していく。弘末論文は、東南アジア地域概念の多面性を示す。戦中戦後にアメリカで形成された「東南アジア」という地域概念の基礎には、伝統的に各地域に存在していた国家群の存在があったとする。日本の該地域研究は、アメリカの政治概念に囚われない様に該地域の独自性を追求し、自然環境への人間の生態的適応と、そこに形成される社会組織や政治文化を考察した結果として、伝統的「小型家産制国家」の存在を指摘したのである。そして果して東南アジアが一つの世界かという問題については、他世界との歴史的関連の中で相対化し、回答の多様な可能性を示す。本論文は、日本の「南方」概念も視野に入れ、また「中国世界とはなにか」等の問いを他地域研究者に発しており刺激的である。

第二部には、川崎有三「部族・民族・エスニシティ」、林正寛「伝達と規範意識」、李焯然「歴史観・歴史意識」、吉田伸之

「都市と農村、社会と権力」の四論文が収められている。川崎論文は、部族・民族・エスニシティについて、それぞれ語義を検討し、三者の中の連続性を指摘する一方、その相違にも注目する。そして後二者についてはアイデンティティに基づくとし、その具体的事例として東南アジアを取り上げる。林論文は、意識化された母語を「われわれのことば」とし、普段特に意識されない筈の「われわれのことば」を実感する他言語との接触の中で、多様に「われわれ」の意識が伸縮し、また一方伝達手段を持ちえない相手との間には「橋わたし言語」が誕生するとする。そしてその「橋わたし言語」の成長について経済、政治、軍事、歴史等の各方面から検討し、更にその国語化という問題に取り組み、「群れ」と「群れ」を結ぶ「橋わたし言語」の誕生が「群れ」の再編を促すという事態を具体例に基づいて指摘する。李論文は、中国における「史」、歴史観を考察する。各時代の政治状況と歴史観の関係、また中国の歴史観に特徴的な「時」「変」「常」という三要素を指摘し、中国の知識人の思考と歴史との関係を示す。

そして、『河殤』に示される様な現在の風潮に対し、「自己の歴史と訣別しうる民族などありえない」と警鐘を鳴らす。吉田論文は、前近代日本に存在する都市とよびうる多様な社会Ⅱ空間構造の典型を城下町に求め、「日本の社会における都市と農村の社会規模での分離」過程、そして戦国城下町から江戸巨大都市に到る展開の中に示される複合化、多様化の過程の考察を通じて、城下町に凝集的に具現化される都市性の諸形態を示す。

第三部には、鳥井裕美子「近世日本のアジア認識」、ジョシユア・フォーゲル「戦前日本の民間中国学」、中見立夫「地域概念の政治性」の三論文が収められている。鳥井論文は、江戸末期の地理書に見えるアジア情報の情報源、伝達経路、それに対する評価を示し、東南アジアに対しては一貫して資源重視の傾向があり、東アジアに対しては十八世紀に優越感へと意識転換が生じるとする。フォーゲル論文は、アカデミズムとは異なる領域としての「民間」における中国研究の蓄積、中国像を、中江丑吉、川合貞吉を例として、アカデミズム側の内

藤湖南を意識しつつ論じている。中見論文は、日本人の対外観の中に形成された地域概念を追い、「満洲」「満鮮」「蒙疆」「満蒙」そして「大東亜」といったといった地域概念が、それら地域から自生的に誕生したの

ではなく、外部からの政治的軍事的意図に基づいて設定されたとする。「地域」設定の問題は、「地域研究」の出発点における根本的問題でもあり、研究の到達点ともなる。

(川島 真)

会 告

本年度の史学会大会(十一月二・一三日)の会場は、東京大学経済学部になりましたのでお知らせ致します。